

恋愛戦線離脱宣言

J y u r i & Y a b i r o

月城うさぎ

Usagi Tsukiobiro



エタニティ文庫

目次

恋愛戦線離脱宣言

5

未来への約束

305

書き下ろし番外編 二人の一步

339

恋愛戦線離脱宣言

宣戦布告編

世間では、三十路みそじになる娘が結婚の「け」の字も匂わせないと、親戚しんせきの目が厳しくなるらしい。

「お宅のお嬢さん、そろそろ結婚は？」なんてお節介せつかいなおばさんたちはどこにでもいるようで。そう訊かれるたびに言い訳を考えるこっちの苦労も考えろ！ と、母から理不尽な文句を言われたのも、記憶に新しい。

せめて交際相手がいれば、両親も少しは対応できるのだろうが、残念ながらそれもなし。娘が早くから一生独身を宣言している我が家では、周囲からふられる年頃の娘の話題を、終始苦笑いを貫つらぬき通して乗り切っているそうだ。

そんなアラサー世代の私こと、朝霧樹里あさぎりじゅりは、先月の誕生日でめでたく二十代最後の年を迎えた。

誕生日を、家族と友人以外の特別な誰かと祝ったことなど、今まで一度もなし。だからと言って、それを悲観しているなんてことはまったくない。幼い頃から派手な恋愛劇

を繰り広げていた兄二人と姉を見て育った私は、既に幼稚園の頃から「恋なんてするもんじゃねーな……」と、冷めた感想を抱いて育ったのだ。

そこそこ整った両親の容姿を受け継いだ兄姉は、身内の欲目を除いても見目麗うるわしく、恋人が絶えることがなかった。恋愛体質と言っまうていいほど、常に誰かと交際をしていた記憶がある。が、派手な交際を繰り広げる分トラブルも尽きなくて、いつも何かと厄介事に巻き込まれていた。

女の子大好きな上の兄は、大学卒業と同時に付き合っていた彼女の妊娠が発覚。いわゆるできちゃった結婚で責任を取らされる羽目になったのだが、姉曰いわく「あれはやられたわね……」とのこと。当時中学生だった私は、心の中で彼に「ご愁傷様しゅうしょうさま」と祝いの言葉を贈った。

大手化粧品会社に就職した五歳上の姉は、略奪愛が大好きという困った人だった。普通に話す分には楽しくて面倒見のいい姉なのに、どうして恋が絡むとこんなに性質が悪くなっちゃうのか、妹の私にも理解できない。

そんな姉は二十六のときに、不倫関係にあった上司と結婚した。え、奥さん？ 当然、離婚させた後で結婚したわよ。ちなみに奥さんも不倫していたらしく、上司の方から離婚に踏み切ったという話だけど、私だけは知っている。奥さんの浮気には姉が関与していたことを――

『でもお互い幸せな再婚生活を送っているんだから、終わりよければ全てよしよね!』なんて、ウェディングドレスを着て美しく微笑みながら私に告げた姉には、もはやため息しか出なかった。ようやく彼氏をとつかえひつかえしていた娘が落ち着いたことに、両親は素直に喜んでいたけれど。——勿論不倫うんぬんに関するこの事実を、両親は知らない。

そして二番目の兄は、パツと見スポーツが得意そうな好青年で、ジムのトレーナーをしている。この人だけはまともであってほしいと願ったが、どうやら告白されると断れないという、ある意味最低な優しさを持つ男だった。

ちなみに、現在彼女が五人いるらしい。そしてその彼女全員が、自分以外にも兄に交際相手がいることを了承済みなんだとか。『全員平等に愛しているんだよ』なんて笑顔で告げられても、到底理解できません。私と一番年が近いこの兄と同じ学校に行かなくて、本当によかったと思う。

この三人を見ていけば、必然的に恋愛する気も失せるだろう。

学生時代、女子生徒の憧れの的や、いわゆる学園のアイドルなんかがいても、私が周りの女子と一緒に騒ぐことはなかった。同級生からは、『美形な姉妹に囲まれて目が肥えているんだよ!』なんて言われたけれど、それは違うと思う。

私はずっと、恋愛戦線からは一歩離れて、傍観者の立場を買っていた。だってイケメ

ンにかかると碌なことがないって知っていたから。

それに私は上の三人のような、派手な容姿をしていない。昔も今も、度の入っていない眼鏡をかけて、地味で目立たない格好をしている。顔の造りは一応似ているけれど、雰囲気は華やかさが欠け、そして何事にもドライだったため、正直ぼっとしない平凡な存在だった。

親しい友人はいても交友関係は広くはなくて、異性から告白されたこともない。まあ、それはそう望んでいたんだけど。

そして二十九になった現在。外資系の商社に就職して、目の前の仕事をがんばり続けていたら、いつの間にか部下を持つまで昇進していた。

身長は平均より少し上の百六十センチ前半。髪はダークブラウンに染めているけれど、巻いていないストレート。後ろに一つで束ねて、ブルーライトを遮断する眼鏡を愛用。化粧は一応するが、基本は地味で色味を抑えたナチュラルメイク。

この容姿に加えて、きびきびした性格なので、細かくて厳しい人だと思われがちだ。けれど、常に公平を心がけているからか、部下と上司からの信頼はそこそこ篤い——はず。恋愛には興味なし。結婚願望も勿論なし。老後の貯金も着実に貯まりつつあるし、三十代に入ったら、マンションでも購入しようかしらと思いつつある今日この頃。

恋愛しないからって不自由は感じないし、平和で充実した毎日を送っている。

が、そんな私にも、一つだけ人には知られたくない秘密があった。
それは――

プル、プルルル

「はい、海外事業部二課の朝霧です」

『お疲れ様です。経理の白鳥です』

「っ！」

嘘、めったに電話がかかってこない白鳥さん、来たー!?

内心の興奮を外に漏らさないよう、周囲に気を付けながら、冷静に会話を続ける。その後課長に繋いでほしいとお願いされたので、タイミングよく席に戻ってきたうちの課長に内線をまわした。

受話器を置いて時計を見れば、休憩時間に入っている。私はそそくさと化粧室へ向かった。

個室のトイレに入って、深呼吸を繰り返す。

ヤバイ……、あの声の破壊力は、ヤバイ。

ああもう、なんつってスバラシイ美声なの、白鳥さんー!

めったにうちのフロアには立ち寄らない人なので、なかなか生の声は聞けない。でも、あの落ち着いていて、包容力溢れる美しいテノールの声は、絶大な破壊力を持っている。少し聞くだけで癒されるわ。

できることならあの声でもう一度「お疲れ様です」って囁いてほしい……。それだけで、残業を二時間は余裕でこなせる自信がある。

だって彼の声が大好物なんだもの。

先ほどの白鳥さんの声を脳内再生させて悶えていたら、若い女性社員の声が外から飛び込んで来た。どうやら何人かで話しながら、このトイレに来たらしい。何だか出るタイミングを逸してしまった。

「……で、今ハマってる海外ドラマの主人公が、もう超々かつこよくって！ 特に吹き替えをしている声優さんの声がピッタリなんですよー！」

「へえ、なんていうドラマなの？」

少し高めの声の若い女性に、化粧直しをしているであろうもう一人が尋ねた。

「Majority People っていうドラマで、略してMPです。その主人公のジャックが見た目も渋くていい味出してるんですけど、吹き替えの声優もなんと声優界の大御所なんですよー！ 超豪華！」

「ふん、そんなにいい声なの？」

「大好物です！」

きっぱりと肯定した彼女に、もう一人が一言「落ち着け」と冷静に告げた。そしてD
VDを貸すから見てほしいなんて話をして、彼女たちは去って行った。

私はといえば、静かに二人の会話を盗み聞きしながら、「話に混ざりたい！」と、心
の中で叫んでいた。

知ってる、知ってるわよそのドラマ！ だって私も見ているもの。レンタルしてシー
ズンIIまで連休潰してぶっ続けで見て、ようやく今テレビでやってるシーズンIIIに追いつ
いたんだから！

「わかる、わかるわー。ジャックがかっこいいのは」

キャラクターも俳優の演技力も抜群にいいのは認める。だけどジャックの魅力はそれ
だけじゃない。

だって彼の声は七色の声を持つと言われてる、あの春川伊吹はるか いぶきが吹き替えているの
よ!? 本人はもう還暦かんれき間近なのに、いまだに声は衰えていない。そして渋みのあるダ
ンディーなその声は、ジャックの役柄にピッタリはまっていた。

中年の役だけじゃなく、彼は青年から老人、さらには犬や鳥などの動物の声さえも違
和感なく演じる。尾てい骨に響くようなエロボイスで、冷徹な魔王キヤラを演じた話題
作のアニメでは、それを見ながら悶もどえ死ぬかと思うほどだった。

「ヤバい、思い出ただけで鼻血出そう……」

悪役でもないじゃないの、かっこよければ！ むしろ王子様的なヒーローより、悪役
で美形の方がぐつと来るわよ。ポイント高いわよ！

アニメのイラストはいかにも敵役の黒々しい魔王なのに、声が春川さんってだけでD
VDの予約販売前から購入を決意。実際見てみれば、彼の声は役柄と抜群にマッチして
いて、女性視聴者の心を鷲掴わしつかみにしている。アニメの最終回を見た直後、勢いでゲーム
まで買ったおうちおうちと真剣に悩んだほど、私のハマリ具合はヤバかった。

「はあ、ここに誰もいなくてよかったわ……」

こんなにやけた顔をした女が、「いつもクールですね」と言われる朝霧樹里と同一人
物だなんて思われたくない。せっかく作り上げた社内での私のイメージが崩壊する。い
や、まあ、基本声がかかわらなければテンションも落ち着いているんだけど。

そう、だから絶対に秘密を守らなくては。

私が無類むるいの声フェチだということを――

別にアニメが好きなのわけではない。ただ、好きな声優の声を聞くには、アニメをチェッ
クするのが一番手っ取り早いわけ。

お気に入りの声優がアニメに出るとわかれば、即予約。深夜放送もできるだけリアル
タイムで見たいところだけど、金曜日ならともかく、平日に夜中まで起きているのは辛

いからね。

海外ドラマも当然チェック済み。洋画だってDVDを借りてきて、英語の字幕付き+日本語吹き替えで見ているのだ。

ああ、でも本当に、声がいい男の人は最高ね！ 見た目は普通でも、声がいいだけでどうして数倍かつこよく見えるのかしら。とはいえ、私は彼らを恋愛対象として見ていくわけではない。

アニメやドラマの二次元と、三次元は別もの。現実世界で、声の素敵な男性を恋人に求めているわけではないのだ。

先ほどの電話の相手である白鳥さんだって、社内で一、二位を争うほどの美声と評判だが、決して恋愛対象ではない。そもそも彼は既婚者で、既に中学生のお子さんだっているのだが。もし彼が独身だったとしても、私は彼をそういう目で見ることはないだろう。「あ、いけない。そろそろ戻らないと」

自分の席に戻りながら、先ほど彼女がはしゃいでいたドラマを再び思い出す。

やっぱりMPの中なら断然ジャックがいい。あの渋さに男気、そして声！ ご飯が進むこと間違いなしだ。

内心上機嫌でデスクに戻った私に、後ろから可憐な声がかけられた。それは私の夜の予定を尋ねるもので――

「飲み会？」

「はい、今夜うちと隣の課で合同でやらないかって誘われました。たまには主任もどうですか？」

隣の課の海外事業部一課をちらりと盗み見る。話を持ってきたかわいこちゃんこと宮内遥は、私より五歳下の二十四歳だ。緩く巻かれた髪に、フェミニンさを意識したビジネスカジュアル服。うちの部は私服なので、彼女は毎日かわいくかつ崩しすぎないオシャレをしている。我が社では、総務とか他所に行けば制服を支給されることもあるが。ああ、あと秘書課もそうね。ジャケット着用は秘書課の特徴かしら。

海外事業部の二つの課は、たまにこうやって飲みに行ったりしている。でも大抵私はパスしていた。都合が合わなかったり、残業があつて無理だったり、理由は様々だが。付き合いで行くときもあるけれど、家には早く帰りたいのが本音。だって録画している番組、早く見たいじゃないの。当然そんなこと、周りには言わないけど。

でもこの先急ぎの仕事が入ってこない限り、今日は珍しく定時で上がれそうではある。ならばたまにはいいか――そう思いはじめた私に、彼女は何を思ったのか、声をひそめて言ってきた。

「それとも、デート入ってますか？」

こっそりと、でもどことなくはずんだ調子で尋ねられた内容に、苦笑する。彼女は私

が恋愛しない主義なことを知っていて、何故かそれに不満を抱いているらしい。

「金曜日だけデートはないわねー。仕事が彼氏だから」

にこりと笑いかけたら、明らかに残念そうな顔をされてしまった。ここまで素直に感情を表に出してくれると、逆に慕われていると思えて嬉しくなる。妹がいたらこんな感じなのかもしれない。

「まあ、いつか。今日は忙しくないし、ちゃんと定時で上がれそうだしね。あ、でも念のため参加メンバーを教えてください。」

「パアッと明るい顔になった彼女は、「勿論です！」と頷いてくれた。

——だがここで教えられた情報が既に操作されていたことに、迂闊な私は気付かなかった。



「——で？ 何であんたまでここに居るわけ？」

「いや悪いか。お前の部下から誘われて来たついでに、随分な言い草ですね？ 朝霧主任」

会社から徒歩十分の、会社メンバー行きつけの居酒屋。飲み始めて二十分が経過した

頃、今私の隣に座っている男はやって来た。

どこにいても人目を引くこの男を見た瞬間、私のテンションは急降下した。他の女の子たちのテンションは一気に上がったが。

同期で入社した海外事業部一課の係長、鬼束八尋。空いていた私の隣に断りなく座ったこの男は、私に対してだけは、どこか嫌味な口調で話す。

真つ黒で烏のような髪は清潔感があり、いつも綺麗にセットされている。凛々しい眉、高い鼻梁の精悍な顔。真顔で睨むとその目に鋭さが宿るが、外面はよくて社内ではめつたに怒らないから、鬼束のそんな目を見たことがある社員はあまりいないだろう。見た目と違い、比較的温和な性格だと周りから思われている。——そう、思われているのだ。

だが、この手のタイプの男を怒らせると面倒だということを、私は経験上知っている。ちよつとムカついただけなら笑顔で怒り、本気のときは冷ややかに怒る。声を荒らげないからって優しいわけじゃないのよ、諸君。

正直言うと、あまり近寄りたくない。だって顔のいい男はトラブルの元だもの。

そう、こいつは我が社でもトップ三に入るイケメンで、女子社員の憧れの的でもある。確かに見目はいい。兄たちのおかげでイケメンには耐性がついている私でさえ、そこそこかっこいいと思う。優男風の兄たちとはまた違ったタイプのイケメンだ。ちよつと笑顔で話しかければ、大抵の女の子は見惚れるほどに。

けれど、ダメよ子羊ちゃんたち。ちゃんと本性を見抜いて近寄らないと、痛い目見るわよ。兄たちで男を見る目を養って来た私が言うんだから。

「あ、タバコは外だよ。ここで吸う気じゃないでしょうね?」

「まさか。吸うわけないだろ。あ、すみません。ビールもう二杯追加で」

呼び止められた店員の女の子は、こいつの営業用スマイルと低めの声にやられて、頬を赤く染めた。この男、認めたくないけれど、実は白鳥さんと並ぶほどの美声を持っている。

テノールの声が美しく穏やかな癒し系の白鳥さんと、耳元で囁かれたら腰に響く、危険な色気を孕むバリトンの鬼束。「どっちも選べない!」なんて女子の会話を耳にしたことがあった。

が、私は断然癒し系の白鳥さん推しだ。だってこいつは危険すぎる。君子危うきに近寄らず、よ。

そして同じ低音ボイスなら断然、声優の春川伊吹がいい。彼に比べたら鬼束なんて、洪みも声の深さもないじゃないの。——年齢も世代も違うけど。

すっかりでき上がっている課のメンバーを、ビールを飲みながら眺める。圧倒的に女性よりも男性が多いうちの一课と二課で、今宵集まったメンバーは十名ちよつと。遙ちゃんの他に女性は、私を含めて三人だ。

「主任、飲んでますか?」

「ええ、飲んでるし食べてるわよ。遙ちゃんは……ああ、あなた結構いける口だったわね」酔っている口調に見せているのは演技だ。そういえばこの子は、一课の新人社員を狙っているって噂があったわね……。マジだったのか、あれ。

小さく意味深な微笑みを見せられて、私は何も知らないフリを貫くと目線のみで答えた。

隣に座る男が相変わらず興味深そうに私を眺めてくる。こいつは暇さえあれば何かと私に突つかかって来るからめんどくさい。いや、からかって遊んでいるのか、この私で。

「言いたいことがあるならばつきり言いなさいよ、鬱陶しい」

「いや? 部下から慕われていいじゃないですか」

「そのニヤニヤ笑いと口調、何とかならないの」と言ったところで、一课の男性社員が、「主任、質問が!」と拳手した。

「一生独身宣言をしているって本当ですか!」

ぶふ、っと口に含んだものを噴き出しそうになったのは、私ではなくて周りの男性陣だ。周囲の目が一齐に私に向けられる。

そんな彼に、私は余裕のある笑顔を返した。

「ええ、恋愛する気も、結婚願望もないけれど。それがどうかした?」

空気が静まった直後——、私の二歳下の女子社員が、素朴な疑問を口にした。
 「でも、子供は欲しくなかったりしません？ その場合はどうするんです？」
 「子供は好きだけど、別に自分で生まなくてもいいかと思ってる。それに子供が欲しくなったら、養子でももらうから問題ないわ」

既に兄と姉に子供はいるんだから、両親も文句は言わないだろう。
 そう言ったら、「えええ〜!」と非難なのか残念なのか、なんともいえないトーンの声が上がった。一体何故。

ふと隣で黙り込んでいる男から視線を感じた。真顔で黙られると、何だか居心地が悪い。ちよっと移動しようかしら。

腰を浮かしたところで、ぐいっと手首を引っ張られる。

「何か？ 鬼束係長」

「どこに行く気だ？ ここにいろ」

ちよっと、どここの俺様よ。いきなり何でそんな不機嫌モードになってるのよ、めんどくさいわね。人当たりのいいキャラはどうした。

何だか微妙な空気を肌で感じながらも、しょうがないので私は再度腰を下ろした。そしてひたすら杯を重ね箸を動かして、飲み食いして走った。帰ったら録画しておいたアニメとドラマを見るのだと、この先を楽しむを見出して。

散々飲んで食べて、ようやく帰ることになったのだが——

何で私はこいつと二人でタクシーに乗っているんだ。いや、何故タクシーに押し込められたんだ。ふざけるなよ、鬼束。

遥ちゃんが「送ってあげてくださいね」なんて余計なことを言わなければ、こんな展開にはならなかっただろう。ビール二杯で酔うわけなのに、彼女も何を考えているんだか。

鬼束は、しばらく窓の外を眺めていたが、ふいに私に話を振った。

「お前、明日は暇だよな？」

「はい？」

ちよっと待ちなさいよ。ふつうはそう断言しないでしよう。確信を持って言えるのは、私の行動をよく把握している両親と、兄弟&限られた友人だけ。つまり、私の生活を知っている数少ない人間のみだ。なのにいきなりの俺様口調は一体何なの。

「……暇じゃないけれど」

「そうか暇か。それなら俺の用事に付き合ってもらおうか」

「ちよっと、私は暇じゃないと言ってるでしょ」

じろりと眼鏡の奥から睨みつけてやれば、鬼束は不遜な笑みを浮かべた。何だか嫌な予感がする。

「ああ、そういえば……、この間お前の部下がやらかした仕事のミスを一課でフォローしたことがあったっけなあ？ あれで貸しが一つできたはずだったな。まだ返してもらっていないんだが」

「あ、あれは……！」

「俺の頼みを一つ聞いてくれるなら、チャラにしてやってもいいぜ？」
うぐっ！

……何故仕事の借りを、プライベートで私が返さないといけないの。確かにあのときは助けられたけども。

沸々とわきあがって来る怒りを宥めて、私は深く息を吐いた。こうなったら仕方がない。腹の底から出すような低い声で尋ねる。

「頼みって、何」

そんな私の態度を面白がるように見つめてから、鬼束は「大したことじゃないけどな」と前置きした。

「明日指定した場所に来てくれるだけでいい。一応服装には気を抜くなよ」

「は？」

それから奴は「後でメールする」とだけ告げた。ほどなくしてタクシーは私の自宅のマンション前に到着した。

そして数十分後。本当にメールが届いた。読み進めていくうちに、顔が引きつる。

『可憐で清楚な控えめ女子にはまず見えないだろうから、お前が一番自分に似合っていて魅力的だと思える鑑を纏え。化粧もしつかりやれよ。女の闘いに挑む覚悟で来い』

確かにさっき服装には気を付けると言われたが、細かく指定されたこの余計な項目は何なの。

「何これ、まさかこの通りの格好をしろだなんて言わないわよね？」

その勝手すぎる内容と意味不明さ加減に、もはや嫌な予感しかない。そのせいで、私は楽しみにしていたドラマを見るどころではなくなってしまうた。



早朝八時。週末のこの時間は、いつも余裕でベッドの住人になっている私だったが、今日だけはたましく鳴り響くドアのチャイムによって起こされた。

すぐに鳴りやむかと思いきや、相手はしつこい。五回目の「ピンポン」を聞いた後、私はついにベッドから起き上がった。

まったく、休日のこんな朝から、非常識にも程がある！

犯人は間違いなく、いつも通り迷惑な二人のうちどちらかだろう。兄——一番上の——

か姉、今回はどっちだ。

くだらない夫婦喧嘩をしたとか、匿かくまってほしいとか。そんな用件で頻繁ひんぱんにやってくるのだ、彼らは。ちなみに二番目の兄はこういった点、まだ比較的常識人である。

寝起きでばさばさな髪とパジャマ姿のまま、私は勢いよくドアを開けた。

「うっさいわよ今度は何やらかしたの！　ここは駆け込み寺じゃないって……」

最初に視界に飛び込んできたのは、長兄のものにしては少し大きめな靴。次に色の濃いジーンズと、長い足。徐々に視線を上げて、私は固まった。

その相手——昨日私に無理やり借りを返せと要求した男——が、呆れたため息を吐いた。

「お前……、誰が来たか確認もせずに扉を開けるな。無用心にも程がある」

「おはよう」、でもなく、「早くから来て悪いな」でもない。開口一番に怒られて、私の頬は引きつった。

あんた、何でここにいる！

寒いからさっさと上がらせろという奴の言い分を渋々呑んで、リビングに通ず。ちなみに今は十一月の中旬である。

昨日はあれから散々DVDを見続けていたため、ソファ周りは若干散らかっていた。でも、こいつは別に気にしないだろう。私もどう思われたって構わない。

「朝っぱらから何しに来たのよ……。とんだ安眠妨害よ」

眠りについたのは、夜中の三時すぎ。それまでに、お気に入りの映画を二本鑑賞した。素敵な美声で癒されるため——すなわち精神安定剤代わりだ。一応癒されたが、同時に興奮もしたので、なかなか寝つけなかった。

「もう八時だろ。お前なら起きてると思っただよ。朝は強いんじゃないのか」

「それは平日だけ。休み前は夜中まで映画鑑賞するのよ、私は。日頃のストレスを発散させないと」

とりあえずインスタントのコーヒーを淹いれてあげたのだが、鬼束はちらりと私を見て、眉を蹙ひそめた。

休日だからか、彼は前髪を下ろしている。同期で同い年のこの男は、いつもは実年齢より年上に見えるのに、今日は私服と髪型で一応年相応の二十代後半に見える。が、コーヒーのお礼を言うには、その苦い表情はマッチしていないわよ。

「とりあえず、お前はさっさと着替えて来い。目のやり場に困る」

「はあ？」

そう言われて、ようやく自分がまだパジャマ姿だったことに気付いた。

シルクのお気に入りのパジャマは、着心地も寝心地も抜群だけど、身体のラインが出るもので……

た、確かにこれは、身内以外に見られるのは恥ずかしいかも。

そそくさと寝室へ戻った後、ブーツカットのジーンズとカットソーに着替えて、洗面所で顔を洗った。メイクは……別にもういいや、すっぴんで。どうせいつも地味メイクしかしてないんだし、それに寝起き姿を見られているんだから今さらだわ。髪を梳かして、簡単に身だしなみを整えてから、再びリビングへ戻った。

「お前さっき誰と勘違いしたんだ？」

コーヒーを飲み終わり、ソファにゆったりと座る男は、長い足を組み替えて尋ねてきた。身内以外の若い男が家にいる違和感、半端ない。

「ああ、姉と兄よ。いつも駆け込み寺のように人の家に来るからね。アポなしで」

納得顔をした鬼東は、時計を確認して立ち上がる。っていうか、あんた本当に何しに来たのよ？ と訝る私に、奴は言った。

「お前のクローゼットを見せてみる」と。

「ちよっと！ 人の寝室に勝手に入るな！」

この男にはデリカシーってものがないのか。

レディの部屋に突然来たかと思えば寝室にまで入るって、どういう神経しているのよ。私はあんたの彼女でも何でもないぞ！

これが兄たちなら遠慮なく蹴っ飛ばしている。いや、もういつそのこと、こいつにもやっちゃっていいよね？

寝起きそのままの状態のベッドをチラ見した鬼東は、これ見よがしにため息を吐いた。

ちよっとマジで感じ悪いわよ……

「色気のない部屋だな……。何この殺風景さ。仮にも女なら、どこかに華やかさを付け加えた方がいいぞ。風水的にも」

「あんたはいつから風水師に転職したんだ！」

確かに必要最低限のものしか置かない主義だし、色味がほとんどないこともわかっている。いつも姉からダメ出しされるので、女の子らしい部屋じゃないことはとっくに自覚していた。

カーテンでもいいから、ピンクや花柄とかに変えろと言われて、早一カ月が経過。姉が来る前に模様替えをしようと思っていたところだった。が、何故こいつに言われねばならん。

さらに勝手にクローゼットを開けて私のワードローブを物色し始めた奴は、深々とため息を吐いてダメ出した。「やっぱり使えねえ……」と。失礼な。

「昨日メールを送った後に気付いたんだよ。お前にきちんとした鎧を着て来いだなんて言ったら、いつも通りの地味で冴えないグレーのスーツで現れるんじゃないかってな」

「げっ、何でそれを……」

ってゆーか地味で冴えないはよけいじゃ。

まあ確かに、仕事着でいいかと思っていた。そもそも今日の目的がわかっていないんだから。

「仕方ねえ。さつき予約入れておいてよかつたぜ。これから外行くぞ。あ、メイクはすっぴんのままでいい。だが眼鏡はコンタクトにしておけよ」

予約って何？ 外に行くって、今から？ 一体どこに？

頭の中に疑問は多々浮かぶが、鬼束には一切教える気がないようだ。奴の態度から、それが伝わってくる。

でもここで反論したって、時間のロスになるだけだろう。こいつが私の言い分を聞くとも思えないし、洪々ではあるが、今日奴に付き合うことを私は了承したのだから。

脱力するのを堪えて、「コンタクトの必要はないわ。裸眼で十分見えるし」とだけ告げた。眼鏡は私に必要不可欠なアイテムだ。ある種の防壁ともいえるから、ないと落ち着かない。だからいつもかけているけど、度はほとんど入っていないのだ。

片眉をぴくりと上げた鬼束の顔を横目に、私は秋用のコートを手にとった。



連れていかれた場所は、私でも知っている人気ブランド店だった。鬼束は人当たりのいい笑みで店員にあれこれ指示を出し、私は試着室の住人となっている。これで一体何着目よ……

「まあ、それでいっか」とようやくお許しがもらえたとき、時刻は十一時近くになっていた。お会計は全て彼持ちだ。当然と言えば当然か。

急げと言われて次に拉致られた場所は、美容院だった。オシャレな美容師さんがたくさんいるこの店は、雑誌の有名モデルが来ることでも有名。って、え、ここでメイクまでしてもらえるの？ ちょっと嬉しいけど、でも一体何故。

「あら〜八尋じゃない！ 久しぶりね〜」

「お久しぶりです。相変わらずお綺麗ですね」

「うふ、本当のこと言われても嬉しくないわよ〜！」

なんて言いながら、笑顔で鬼束の肩を力の加減なしに叩くゴージャス美女、推定年齢三十代後半。なんと彼女がこの店のオーナーなんだとか。って、若くない？

が、「この人、あれでもう五十近いんだぞ。でもって、性別は男だ」とぼそりと囁かれて、

啞然とした。何の黒魔術を使っているんですか、あなたは。

「さあさ、座って〜！ 何だかやりがいのある子ね〜。あ、それが服？ うん、どれどれ」私を置いてけぼりにして二人であーだこーだと話している。やがて一通り案が纏まったのか、彼女？ が私の髪を軽く整え始めた。

「毛先はちよつと切るわね。前髪は横に流す感じで……カラーリングはこのままでも問題なさそうね。最近美容院行ったのかしら？」

「ええ、二週間前に」

それなら問題ないわね〜と眩いた彼女に、トリートメントをされて髪をちよこちよこいじられた。その後手早くメイクをされる。私が普段化粧にかける時間とそう変わらないのに、その完成度は雲泥の差。

だがじっくりと鏡の自分を見る暇もなく、試着用のブースに連れていかれる。そして手渡されたのは先ほど購入したAラインのワンピース。シャンパンゴールド色のそれは、膝がギリギリ隠れる位の長さだ。品のある光沢が、シンプルなデザインながらオシヤレ感をアップさせている。その上に黒のボレロを羽織った。

一見パーティードレスっぽいけど、ボレロのおかげで、うまい具合にカジュアルに落ち着いている。

いつの間にか靴まで用意されていて、至れり尽くせりすぎないか？ と疑問を抱きつ

つも、トータルコーディネートはこれで完璧。扉を開くと、私を見た鬼束の目が見開かれた。相当驚いたみたいだ。

「まあ綺麗なお嬢様に変身ね〜！ さつすが私〜！」

自画自賛しながら仕上げに髪を整えてくれるオーナーさん。巻くか巻かないかで悩んでいたけれど、ストレートで正解だったと彼女は言った。

背中の中の真ん中まであるまっすぐな私の髪は、ありえないくらいさらさらヘアになっている。前髪をサイドに流して、最後に控えめなラインストーンがかわいいカチューシャがつけられる。大人可愛いという形容詞がびつたりそのそれは、どこのお嬢様様だよって思ったけど、オーナーさんの褒め具合からきつと似合っているのだろう。

可愛さの中にどこか大人のクールさが混じったこの服装は、いつもの私じゃないみたいで、微妙に恥ずかしい。

カツンとヒールを鳴らして、目の前の姿見に近づく。改めてじっくり確認して、びっくりした。

「うわ、お姉ちゃんそっくり……」

数年前の姉が目の前にいる！ と言われても、信じてしまいそうだ。もともと顔の造りは似ているのだけど、あえて私が地味路線だったから、気付かなかっただけか。若干胸のボリュームが足りない気もするが……悲しくなるからそこには触れまい。

鬼束はしばらく私を見つめたあと「上出来だ」と微笑んで告げ、満足そうに頷いている。つて、私まだこの先のこと聞かされていないんだけど？

それに、そういえばこいつもいつの間に着替えたんだろう。さっきまでカジュアルな服装だったのに、今はスーツを着ている。髪もきちんとセットされて、いつもの老け顔に見えるわよ。あの若さは何処へ。そもそも休日なのに何故スーツなの。

着ていた服は自宅へ送ってくれることになり、支払いは全て鬼束がカードで済ませた。「がんばりなさいね」と笑って見送ってくれたオーナーにお礼を言って、私たちはタクシーに乗り込んだ。

「で？ 私は何をやらされるのかしら。いい加減知りたいんだけど」

じとりとした目で睨めば、爽やかさとは無縁の黒い笑みを貼り付けて、奴は言った。

「今から見合いをぶち壊しに行くぞ」

「はあ!? 冗談はよしこちゃんよ！ 何で私が人様のお見合いをぶち壊しに行かない

といけないわけ？」

「お前、それ古すぎだろ……」

鬼束は呆れ気味に呟いて、ため息を吐いた。母親の口癖が咄嗟に出るほど驚いたのよ、察しなさい。

見ず知らずの人の縁談を台無しにするほど、私は人でなしじゃない。姉なら嬉々として参加しそうだが……法外な報酬つきで。

「安心しろ。お前が壊すのは俺の見合いだ。見ず知らずの他人のじゃない」

普段よりテンションが下がった低い声音で不機嫌そうに呟かれて、私は耳を疑った。

「……つまり。あなたのお見合いに私が乱入して、縁談を壊せてこと？」

「まあ、簡単に言えばそうだな」

さらりと言われて、頬がこれでもかかってくらい引きつった。

そんなの、冗談じゃない。いきなり悪者にさせられてたまるか。

だがその後告げられた追加設定に、顎を落としそうになった。

「お前は俺の結婚を前提とした、交際相手として、それ相応に振る舞ってもらうからな。余計なことは喋るなよ」

さーっと血の気が引いていく音が聞こえた気がした。

「できるわけじゃないでしょう!? そもそもあなたとは付き合ってもいない、ただの同

僚——」

「なら俺と付き合うか」

更なる爆弾を投下されて、もはや開いた口が塞がらない。

「嫌よ。私は恋愛戦線には参戦しないって昔から決めているんだから。社内でも人気の

あんたと付き合うだなんて、嫌でも厄介事に巻き込まれるじゃないの！ トラブルに自ら飛び込むほど愚かじゃないのよ。後方支援に回るか、高みの見物を決め込んで傍観者に徹するか、火の粉が飛ばない場所で我関せずを通すか。危ない前線はイケメン争奪戦に嬉々として参戦する狩人に譲ります」

「……お前は何かから逃れようとしてるんだよ？」

呆れたような声が降って来た。そんなの、嫉妬に狂う同性に決まってるじゃないの。万年モテ期で、常に厄介事の渦中にいた兄姉を見ていれば、嫌でもそう思う。

節操なしで女の子に手を出しまくっていた優男風の一番上の兄は、「あんたを殺して私も死ぬー！」なんて昼ドラでしか見たことのないシーンを、白昼堂々繰り広げていた。周りの人間に止められて無事だったけど、それを見た小学生だった私の衝撃は、一言では語れない。

姉はその美貌と色気を使って、数多の男のハートをゲット。略奪はしても、友達の彼氏には手を出さない常識は一応あつたらしい。が、それでも褒められたものではない。たまに別れさせてほしいという妙な依頼を受けて、お小遣い稼ぎもしていたのだから。爽やかスポーツマン系の次兄だつてそう。博愛主義だかなんだか知らないけれど、彼女は一人だけに絞った方が絶対にいいと思う。二歳上の彼はまだ独身だ。だが、先日彼は私にカミングアウトした。「実は両刀なんだよね」と。聞きたくなかつたけどね！

実は彼氏もいるかもしれないなんて事実、どう受け止めたらいいの。

「——迷惑な兄姉のおかげで、私は早々に悟つたのよ。恋愛なんてしなくても人間生きていける。そんなトラブルに巻き込まれて人生終えるのはごめんだつてね。恋人がいなくても、結婚しなくても、充実した毎日が送れるならそれでいいじゃない」

たまに街中ですれ違う人の声が美声だったり、店員さんの声が好きな声優さんに似ていたり。そんな些細なことに気付くだけで胸がときめく。

そう、私は「美声」という萌え要素があれば楽しく生きていけるんだから。テレビとネットがあれば一人だつて寂しくない。

「……本気でそう思っているのか？」

どこか不機嫌さを帯びた声で尋ねられたと同時に、タクシーが停まった。無言で車から降ろされて、居心地の悪い空気が流れる。

到着した先はいかにも……な感じの、高級料亭。ここ、ランチでも一体いくらするのとやら。訊くのも怖い。

ビビる私をよそに、鬼束は逃がさないとばかりに私の手首をぎゅっと握り、さつさと進んで行った。私はというと、いきなり手首をつかまれて思いつきり動揺していた。だが奴は、そんな私を完全無視だ。

老舗旅館の女将風の貫禄ある和服姿の女性が、「お待ちしておりました、鬼束様」と

出迎える。そして彼女の案内を当然のように受け入れて進むこの男……やけに慣れている。まさか常連さん？ こんな高級そうなお店で顔を覚えられるほど、通い慣れているのか。

「ちよ、待ちなさいよ！ 私、全然準備できていないんだけど？ 女優になる覚悟はまだ無理だから、せめて台本をよこせっ」

ずんずん進む奴の後ろ姿を見て、冷や汗が流れる。

まずいまずい、まずいわよこのままじゃ！ ぶっつけ本番でがんばれって、どんな鬼畜なの。

「台本なんてあるわけないだろう。適当に話を合わせていればいい。だが、忘れるなよ。お前は俺の婚約者ってことを」

「……はあ!? あんたさっきは結婚を前提とした彼女だって……」

いつの間に婚約者になったのよ！

結婚を前提としたお付き合いと、婚約者の正式な違いはわからんが、なんとなく、後者はもう後戻りできない気がする。結婚するかもしれない交際中と、結婚というゴールに向けて歩み中のカップル。逃げる隙があるのは明らかに前者だ。

しかし、そんな私の抗議は、案内してくれた女将さん（風）によって遮られてしまった。「こちらで皆様お待ちです」

襖ふすまを開けた先には、既に主役を待つ状態で両家が集まっている。振袖姿の若いお嬢さんは、これまた清楚な大和撫子おほなごで……いささか若すぎるのが気になるんだけど。

ねえ、あんたどんだけ若い子とお見合い予定だったの。彼女どう見ても、ハタチ前後って感じよ？ まさかいいところのお嬢さんで、花嫁修業中なのかしら。

鬼東の見合い相手に気が向いていた私は、奴の身内と思しき人物の声が、全く耳に入っていないかった。

「おや、本当に連れて来たのか」

「まさかあの話が嘘だとも？ 言っただら父さん。俺には既に結婚を約束した女性がいるって」

きゅっと手を握られ、はっと気を引き締めた。隣を見上げれば、キラキラした外面そとづらスマイルを向けられる。私は咄嗟とつさに悲鳴を呑み込んだ。鳥肌が立ちそうな腕をさすることでもできず硬直する。

奴の目がすつと細められ「笑え」と訴えて来た。無茶な。

ただけ意地と根性で、私も会社で培つちかってきたスキルを総動員させて笑みを浮かべた。興味津々な鬼東父と見合い相手のご家族に向かってお辞儀をする。

顔を上げた瞬間にかけられた声を聞いて、私の身体は再び石化した。

「まさか本当に愚息に婚約者がいたとはね……お名前を伺ってもよろしいかな？」

ダンディーで渋みがあり、艶のある美声はまさか――

瞬きを忘れて目の前の人物を食い入るように見つめる。タレ目がちで、目尻の皺を深めて微笑む五十年代後半の男性は――私が敬愛してやまない声の持ち主、春川伊吹だった。って、ええー!?

「おい、どうした?」

隣からぼそりと小さく尋ねられて、我に返った。軽く三秒くらい気を失っていたかもしれない。表情はそのまま笑顔で、私は何とか「はじめまして」と告げた。

「このような場に突然お邪魔して申し訳ありません。朝霧樹里と申します……」

この後は通常、〃〇さんとお付き合いさせて頂いております。的なことでも言うのだろう(嘘だけ)。そしてこの場合、相手の名前を正しく呼ばないとまずい。

しかし困った。こいつの下の名前って何だったっけ?

「てめえ、まさか俺の名前忘れたか」なんて、空気だけで訴えかけてくる同僚の器用さが憎い。

だが、出てこないものはしょうがない。私はいつも通りの呼び方でいくことに決めた。「鬼東係長にはいつもお世話になっております」

「おや、同じ職場の方だったのか。もしかして八尋の部下なのかな?」

! そうか、八尋だったか。

私は営業用の笑みを貼り付けたまま、「隣の課で、八尋さんとは同期なのです」と答えた。今回のお見合いは伊吹さんの知り合いのお嬢さんと、簡単に食事会でもという、顔合わせ程度のものであったそう。相手のご家族はそれはそれはいい人たちで、突然現れた私に嫌悪や敵意を向けることなく、笑ってこちらの無礼を許してくれた。「だから言ったではありませんか。八尋さんは素敵な方ですから、既に恋人がいらつしやるはずよっ」なんてことまで言っ

て、お嬢さんはまだ結婚は考えていないそうで、「どうぞお気になさらず。お幸せに」と、無邪気に祝われてしまった。騙している分、心苦しい……

そんなご家族に、私は曖昧な微笑を向けるしかない。平然としている隣の男に、呪いでもかけてやりたいわ。

そんないたたまれない空気はすぐに終わりを迎えた。料理が運び込まれてくる前に先方のご家族が退散したのだ。どうやらもともと、こいつが本当に恋人を連れてきたら退席する予定だったらしい。ぼかんと呆気にとられた私に、夢にまで見た美声が届く。

「いろいろとすまないね、朝霧さん。迷惑でなければ、私とご一緒してくれないだろうか?」

「はい、よろこんで……♡」

一瞬でぼわん、と蕩けそうな目になっている自覚はある。私は勧められた席に座った。

隣に座る鬼東が訝しげな顔をしているが、そんなの視界に入っても構わない。だって目の前には憧れの伊吹様が……！ 海外ドラマや洋画の吹き替え、アニメにナレーション、そして舞台までと、引つ張りだこの声優界の大御所が！ まさか、こいつのお父さんだったなんて、知るはずないじゃないの。

「ねえ、あんたのお父さんって、声優の春川伊吹様だったのね」

「よく気付いたな。テレビには滅多に出ないのに」

にやけそうになるのを必死に堪えて、私は心の底から鬼東に感謝した。

まさか半ば脅された形でこいつの偽婚約者にさせられた後に、こんな特典がついてくるとは。役に入っていない地声も素敵です。

偽物なのに束の間の娘気分を味わえて、幸せだ。ああ、その美声で「樹里さん」って呼んでほしい……。できることなら録音したい。

やっぱり録音はダメかしら？ 私の個人的な楽しみのためだけに使うんであって、どっかに流すなんて絶対にしないと誓うけれど。

「おや、もしかして苦手なものでもあったかな？ 箸が進んでいないようだが」

「そんなことは！ とつてもおいしいですわ」
やばい、妄想トリップして一瞬意識が遠のいていた。

ダンディーな伊吹様は目尻を下げて、「遠慮せずに好きなものを食べてね」と言った。

ああ、息子と違ってそのタレ目がちな目もセクシーで素敵です。

脳内では、どこまでも響くエコーがかかっている。もうその声だけでお腹いっぱいだ。食後のお茶を飲んでいる間も伊吹様は私に声をかけ続けてくれて、私はうつとりと夢見心地になりながら相槌に徹した。訊かれた内容はほとんど覚えていないが、理性だけはかるうじて残して、何とか自分の暴走を食い止めている。頭の中はもう手遅れだけど。

「八尋がこんな愛らしい女性を連れてくるとは……。私があと三十年若ければ、立候補していたらうに」

「まあ、光栄ですわ。ありがとうございます」

と、控えめな微笑付きで口では言っているが、心の中では「今でも十分素敵なおじさまですよ！ むしろ今の美声がいいのに若僧に戻ったら羨みと艶、声の深みが失われてしまいます。若かりし頃のお声も勿論素敵でしたが！」なんて叫んでいた。

ヤバイ。一生独身宣言をしているが、この人に求婚されたらぐらつきそう……。既婚者だけどね。

なんて意志薄弱なのかしら。

「で、式はいつ頃上げるつもりなんだ？」

「さあ、まだそこまでは。お互い忙しいから」

「樹里さんのウェディングドレス姿はさぞかし美しいだろうねえ。母さんを思い出すよ」

そんな結構綱渡り気味の会話が繰り広げられていても、脳内お花畑状態の私は相槌をうっただけで、内容なんてまったく頭に入ってこなかった。

よく聞けば、鬼束も親子だとわかるくらい近い声質だけど、こいつの声に聞き惚れたことは一度もない。まだまだ伊吹様にはほど遠い。修業しなさい、修業！

すっかり伊吹様と打ち解けた頃、名残惜しいが帰る時間になってしまった。

「実はこれから収録でね……大変申し訳ないが、先に失礼させてもらうよ。でも今度は是非、我が家に遊びに来てくださいね」

「はい……よろこんで……♡」

タクシーに乗るその後ろ姿すら、素敵……

伊吹様はロマンズグレーが似合う素敵なおじいちゃんになるだろう。衰えない美声は神の領域。身も心も、ごちそうさまです。

「——い、おい、朝霧！」

「っ!? 何、呼んだ?」

はっと我に戻って、後ろから呼びかけていたらしき男に振り向いた。顔のデレは当然引き締めてから、会社仕様のクール顔を貼り付けて。

髪を下ろした鬼束がじろりと私を睨む。明らかに不満を抱いている顔だ。何かまずい

ことをしでかしたかと、思わず冷や汗が流れそうになった。でも、見合いはぶち壊せたんだから、私はもうお役御免よね?

「えーと、じゃ、そろそろ帰ろうかな……」

一歩後ろに下がったと同時に間合いを詰められて、腕を取られる。驚く暇もなく、間近に奴の精悍な顔が近づいてきた。眉間の皺が深い。

「てめえ、どういふつもりだ」

地を這うような低い怒声がかけられる。

「は? 何が?」

「何が? じゃねー。ずっとオヤジのことを蕩けそうな目で見つめて、しおらしい姿勢しやがって。そんな態度、今まで一度も見たことないぞ。普段のクールで冷静な朝霧主任とは大違いじゃねーか」

「げっ、私が伊吹様のファンだってわかつちやった?」

はあ、と大きくため息を吐いた鬼束は、「やつぱりそうかよ……」と脱力気味にぼやいた。

「お前、オヤジの声が好きなのか」

「大好物よ!」

直球で訊かれ、私は珍しく素直さを見せた。今の私、間違いなく目が輝いているだろう。もうバレてるんなら、隠す必要はない。

が、奴は面白くないと言いたげに、「ふりん」と呟いて——人の悪い笑みをニヤリと浮かべた。

「……そうか。それなら見合いを破談にした成功報酬として、オヤジに頼んで好きな台詞を録音してきてやろうか？ 大サービスだ」

「きゃーッ!? マジですか鬼束様！」

あんたいたいところあるじゃないの！

鎮く同僚を見て、早速私を妄想の嵐がおそった。

どうしよう、MPのジャック声で「お疲れ様。今日も大変だったね」と、仕事の疲れを癒す言葉をかけてもらう？

それとも、「おはよう樹里。朝だよ」なんて朝の目覚まし用の台詞とか。ああ、朝からあの美声が聞けるならそれは最高すぎるわ。名前呼びとかもうキyun死によ！ 一日中ウキウキ気分間違いなしだ！

あとは話題作になったアニメの敵役、カイン声で、冷徹さを感じさせる美声を披露してもらいたいかも。それもいい。魔王の冷たい声で、「樹里。さっさと起きろ。私の手を煩わせるな」とか、言ってもらいたい！ 甘さと辛さを含んだおはようバージョンを二パターン。これ最高。

「依頼料払うから、是非！ ジャックとカイン様のおはようコール、名前呼びでお願いしますす！」

アホな私は、先ほど感じた警戒心をすっかり忘れて、この男に自ら近寄った。

すると、ぐいと腕が引つ張られて、腰が抱き寄せられる。驚く私に、鬼束は唇を耳元に寄せて、低いバリトンボイスで囁いた。

「いいぜ？ ただし、この先もお前には、俺の婚約者でいてもらうがな」

「ちょ、それはもう終わったんじゃない?！」

顔を上げた私に、意地の悪いこの男は目を細めて薄らと笑う。そのとき初めて気がついた。こいつの機嫌が最高に悪いということに。

ヤバいと思ったが時すでに遅し。逃げる隙も間も与えられず、奴は父親に似せた声で「樹里」と呼びかけた。いきなりの名前呼びに驚くが、耳朶に直接吹き込まれた息と、その尾てい骨に響くようなエロボイスに、私の顔が瞬時に赤く染まる。

普段鬼束の声を気に留めたことなんてなかったけれど、この低いバリトン！ なんてエロいの……！

もう一度名前を囁いた直後。真っ赤になって腰が抜けそうになった私を片腕で支えた奴は、私の顔にそっと唇を寄せてきた。

唇に触れた柔らかい感触——

瞬きをするのと同じ位、時間で言ったらほんの一瞬の出来事。

だが、はっきりと伝わってきたそれは、夢だと思ひこむにはリアルすぎて——私の思考は停止した。脳が考えることを放棄したらしい。

呆然と突っ立って、明らかに真っ白になっている私を、鬼束は目を細めて見つめてくる。女子社員たちがはしゃぐ整った容姿をしているその男は、声も出ないほど驚いている私をほほ片腕一本で支えた。多分支えがなかったら、へたり込んでいただろう。

「な、ななな……?」

ようやく出て来た声は、文章にもなっていない言葉の羅列。

その後再現VTRのように、脳内で先ほどの光景がリプレイされた。

唇に合わさった柔らかな感触を思い出して、ここでようやくキスをされたと認識した。

漆黒の髪をくしゃくしゃと下ろした鬼束は、私を腕の中に拘束したまま、いまだ至近距離で見つめてくる。

そして私を見て、「間抜け面」と笑ったこいつの顔を殴りたいっ!

「なっ……なんのつも……!?!」

「宣戦布告のキスだ」

は? 宣戦布告って、何。誰に向かつてよ。——私にか?

「……っざけんじゃねーわよ」

食事の後ですっかり口紅が落ちてしまった唇を、荒々しく手の甲で拭う。唇に残った

感触を消し去るように。そしてもう片手で奴との距離をつくろうともがいた。

近い近い! 何で抱きしめられてんのよ!

顔に熱が集まるのは怒りからだ。決して恥ずかしいからじゃない。

注意深く、面白そうに私を眺めるこの男が心底憎い……。恋愛に慣れていない初心な

反応と誤解されたらムカつくわ。事実だけど、それを他人に指摘されるのは許せないし、

赤面しているのはそういう意味じゃない。

別に今のがファーストキスじゃないけれど、だからといって簡単に唇を許せるわけがない。

ちなみに初めてのキスは幼稚園のときだ。それ以降、色恋を徹底的に避け続けた私に、恋愛経験もスキルもあるわけがない。傍迷惑な身近の人間のおかげで、早くから耳年増にはなっていたが。

「帰る! もう私の役目は終わったんでしょ?」

私はなんとか、強気で言った。

ああ、でも、奴の声を直接耳元で囁かれた所為で、そして不意打ちのキスをされた所為で——認めたくないけれど、足に力が入らない。

こいつの支えを失ったらこの場から動けないのを承知の上で、それでも離せとあがく。いつまで人を抱きしめている気だお前は。そんなの許した覚えはない!

しかし、逆効果かな。もがけばもがくほど、力強さがまして抱き込まれてしまった。つてゆーか今さらだけど、ここは一応、外。人気のない路地だけど、まったく人が来ないわけではない。誰か来たらどうする気なのっ。

人の悪い笑みを貼り付けた鬼東は、ゆっくりと愉悦を含んだ声で告げた。

「終わり？ 誰が終わりだと言った。オヤジは本気で俺たちが結婚するものだと思ってるし、そもそも好きでもない女をこんな面倒事に巻き込むか。どうでもいい女に勘違いさせる真似はしねーよ、俺は」

「……………は？」

ぽかんと口を開けて鬼東の顔を眺める。眉を寄せたまま同時に微笑んでいるようにも見える様は、あんな器用ねと言わざるを得ない。

怒っているの、笑っているの。どっちなの。

「あの、今なんて…………」

頭の中で警報が鳴り響く。この体勢のままこの問いをするのはまずいとわかっているのに、白黒はつきりさせたい性格はときに厄介だ。本能は間違はなく、逃げるぐと言っている。

すつと目を細めて艶然と微笑んだ鬼東は、色気が滲む声を出した。それは伊吹様が演じたカイン様の声にそっくりだった。

「一生独身宣言？ はっ、冗談じゃない。俺がお前を娶るから、覚悟しておけ」

「へ…………？」

覚悟の使い方、違くない？

じゃなくって。魔王様ボイスで、今なんて台詞をー!!?

ぞぞぞとした悪寒に身体が支配される。背筋に冷たい汗が流れて、全身が総毛立った。と同時に脳内で奴の台詞がリプレイされる。

いや、いやいやいや、ないでしょう。ありえないでしょう！ だって私だよ？ 姉と違って色気もない、地味でつまらない、華やかさもない女だよ？ あんた一応社内でも有名なイケメンでしょうが。

「けけけ、結構、結構です！ 間に合ってます遠慮します」

顔を青ざめさせてぶるぶると首を振る私に、鬼東は社内で見かける外面笑みを潜めて、うつそりと笑った。

ひいっ！ こ、怖い…………

「そんなに拒否されると、逆に意地でも落としたくなるよなあ？」

喉の奥でくつくつ笑い始めた鬼東が、本気で恐ろしい。カイン様真つ青の黒さだ。「まったく、オヤジがライバルとか冗談じゃねえ」

唸るような眩きが、顔面蒼白の私に届いた。ん？ ラ、ライバル…………？

ようやく恐怖から立ち直った私は、今ここで反論しないとまずいと思に至る。奴に流されるなんて冗談じゃない。

至近距離のイケメンを睨みつけるように見上げる。ヒールを履いているから普段よりは顔が近いが……こいつ背高いのよね。これでも、身長は頭一個分違う。首が痛い。

「ちよつと待ちなさいよ。私は誰とも結婚する気も、付き合う気もないって前から言っているはずよね？ 愛だの恋だのには興味がないの。だから、たとえ伊吹様であっても、結婚とかまつたくありえないから。伊吹様とでさえそうなんだから、息子のあんたが相手とか論外よ。それにそもそも私はイケメン争奪戦には参戦しない主義なの。あんたと恋仲になっただなんて噂が社内で流れたら、女子社員からどう思われるかつ。平穩無事な生活に恋愛は邪魔なのよ。断固拒否する」

「お前が何に怯えているのかは知らないが、いいから前線に出てこい。正面からやりあつてやるよ」

「は？ 戦うのはあんたとなのか！」

一体いつの間に、そんな話になった？ この流れだと、まさか私はこいつとさして戦い、敗者が相手の言いなりになる、という展開？

つまり、私が負ければ即この男の嫁に……ひ、ひいいい！

「い、いやよ！ 外面だけはいい癖に中身は俺様自己中男となんて、冗談じゃない」

「敵前逃亡は負けとみなすぞ」

——勝負を受けない場合も同じく。

いや待て、応戦表明なんて出していないはず。確かに私は負けず嫌いで白黒はつきりさせたい性質だ。そして、売られたケンカは買う主義でもある。だが、これは流石に即答できない。

あまりの急展開に、頭の中がパニックだ。もう脳が思考を拒否している。この場を逃げ切る案を練る暇もなく、鬼束は私を抱きしめたまま耳元に口を寄せた。

「難攻不落のお姫様を全力で陥落させてやるよ。いつまで抗えるか、見物だな？」

ニヤリと笑ったこいつは、名前の通り鬼だと思った。

「わわわ私は、あんたの声は好みじゃない」

「でもオヤジの声はタイプなんだろ？ なら問題はない。電話じゃよく間違われるしな」

そういえば、こいつの電話を受けたことはほとんどなかった。電話越しの声なんて聞いたことないかもしれない。長い付き合いだが、同じ課にいたこともないし。

一瞬、私を伊吹様の声で口説きにかかる鬼束を想像した。そんなことになったら、私は瞬時に醜態を晒すことになるだろう。嫌だ、それだけは絶対に。こいつの声で悶えて喚く自分なんて、考えたくもない。

「楽しみだな？ 樹里」

「っ!？」

私は楽しくなんてないわよ。

一体いつの間に私に興味を持ったのか謎のまま、私はけなしのプライドを総動員させて毅然と立ち、奴の腕を振り払った。鬼東の声によってダメージを受けた足も腰も、何とか回復している。

「私はそう簡単に落ちないんだから。あんたこそ、他の社員に本性がバレないように気をつけなさいよ。温厚で優しい鬼東係長は、名前の通り鬼で俺様でした——なんて知られたら、女子社員からの人気落ちるわよ」

「んなものどうでもいいけど。ま、それはそれで楽しそうじゃないか」

「だから、私は全然楽しくなんてない」

勝負を受けようとする私に、鬼東は止めを刺す。

「埒が明かねえ。それなら、今すぐこのまま俺の女になるか、正面からやりあつて潔く負けるか。選べ」

「は？ どっちにしる私の負けが前提だなんてふざけてるの？」

「応戦表明を出さなければ負けだぞ」

続けざまに言われ、言葉に詰まった。何だかこいつの掌で踊らされている気分だが、

この男はなかなかしつこい。今すぐ帰りたい私は、渋々領いた。

もう嫌だ、帰りたい。帰ってぐだぐだしながら、お気に入りのDVDとドラマを見まくって癒されたい。

その後、駅まで送ると言われた私は、その申し出を断固拒否をし続けた。しかし、奴は父親に似せたバリトンボイスで攻めまくった。

「あまり騒ぐと注目を浴びるが、いいのか？」

耳朶に吹き込むように囁くのは嫌がらせか。騒がしくさせているのは一体どこの誰だと言えない分、睨みつけるしかない。

身体は離れたはずなのにすかさず手を取られて、半ば引きずられるように駅に向かう。羞恥から真っ赤に染まった顔で睨むが、鬼東の余裕の笑みは崩れない。叫び出したいのをぐつと堪えて、拷問のような時間を耐え続けたのだった。

朝霧樹里、二十九歳独身。彼氏いない歴〓年齢を更新中。

憧れの声優に会い、生の美声を堪能できて悶え狂ったその日——

今後も恋人などつくる予定のない私に、何故か偽の婚約者ができてしまったらしい。

望んでいない戦いの渦中に無理やり放り込まれ、開戦を告げるゴングが打ち鳴らされた。

終わりの見えない戦いは、食うか食われるかの弱肉強食。私の明日は、一体どっちだ。



『行けー！ 野郎ども、槍やりを持って、火を放てー！』

『第一部隊、矢の準備を。飛び道具を使えー！』

——勇猛果敢な兵士たちにそう命令したところで、思考がゆっくりと浮上し、現実世界に引き戻された。

目が覚めた私は、今までいた戦場が夢だったと気付く。あまりにもリアルな光景を思い出しながら先ほどの自分の台詞セリフを反芻はんすうした。

土曜日曜の二日間、私は悪夢に襲われていた。むさ苦しい男共なこまと一緒に戦場を駆け巡るのだ。戦う敵は当然あの男……。安眠妨害とはいい度胸じゃないの、鬼束。

けれど、今の夢で何かいいヒントをもらえた気がする。そう、武器を用意すればいいのよ。

私の弱点が伊吹様に似せたあいつの声ならば、対策は簡単。奴の声を直接聞かなければいいだけの話じゃないの。

朝から黒い笑みを浮かべた私は、鬼退治に挑む桃太郎の気分でベッドから這い上がった。まったく、今思い返してもとんでもない週末を過ごしてしまったものだ。土曜日、何とか無事に自宅まで帰った私が一番にしたことは、スマホの電源をオフにして、現実逃避に耽ひたることだった。

ラフな部屋着に着替えてリラックスマードになり、アニメの中のカインに癒いしを求め、ジャックに男気を学んだ。どちらの伊吹様もかっこよすぎて甲乙つけがたい。決して温かみのあるタンデイーな声のジャックに、冷徹さが滲じみ出る孤高の魔王カイン。とても同一人物が演じているとは思えない。まさしく神ボイス！

一通り声を堪能たんのうした後は、買ったまま読む暇がなかったライトノベルを漁あった。このライトノベルは昨年アニメ化もされていて、伊吹様も出演したのだ。若手からベテランまで、豪華声優陣が声をあてたことで、私みたいな声フェチからの支持も集めた。

アニメのシーズンIが終わっても、原作はまだ続いている。声目当てでアニメを見ていたけれど、ストーリーの続きも気になってしまい、つい原作を手にとってしまった。物語の世界を脳内アテレコしながら没頭する。アニメで聞いていた声と美麗なイラストで、十分リアルに声が再現できるわよ。キャラの台詞の一つ一つがその声を演じていた声優さんと重なって、私は声なくソファに突っ伏した。

ああ、楽しい……！

本を読んでいても声が自動で脳内再生できるって、私のこの特技、ある意味最高。このアニメ、シリーズⅡもやってくれないかしら……。私がスポンサーになれるくらい金持ちだったら、声優さんたちがもつと活躍できる機会を与えられるのに。なんて、今の自分じゃどうしようもないことを考えてしまう。

その後、ゆっくりお風呂に浸かった。ちなみにBGMはネットで買った伊吹様のドラマCD。欲しいものが家にいながらにして手に入れられるネットショッピングは本当に楽だ。いい時代になったわ、なんて思いつつ、私は徹底的に現実逃避に走っていた。が、そんなことをしたって、心の安定は保てても、現実が変わるわけではない。当然だけど、時間は止まってくれないのだ。

そして迎えた月曜日の午前六時。

出勤用の服に着替えながら、ふとハンガーにかかっているワンピースを見やる。シャパンゴールドのそれが、あの見合いが現実だったと証明していた。

さて、奴の声を聞かないためにはどうするべきか――

うーんと唸りながら朝食を口にして、身だしなみを整えた後、駅に向かった。

恋だの愛だのは身を破滅に導く。そう教えを自分に説いてきたのに、まさかこんな厄介事に巻き込まれてしまうとは。なんて災難なの。これじゃ何のために、地味で目立たないよう振る舞って、独身宣言をしているんだかわからない。

あんなふうに取り乱したり、蕩けるような目で誰かを見つめたり、自分の秘密をバラしたりなんて失態を、まさかあいつの前でやってしまうとは……

油断大敵、鬼束鬼門。あら、語呂いいかも。

「そう、鬼門よ、あいつは。伊吹様の息子だなんて詐欺だ……」

確かに声質はちよつと似ているけれど。

いつも通り朝早く出勤してデスクについた私に、珍しく早く来ていた遙ちゃんが近づいてくる。

「おはようございます、朝霧主任」

「おはよう、遙ちゃん。何だか朝からご機嫌ね？」

月曜だっというのに、若い子は元気でいいわね、なんて、おばさんくさい感想を抱いてしまう。たかが五歳、されど五歳。五歳の差は案外でかい。四捨五入すれば彼女はまだ二十歳なんだから。

今日も完璧な巻き髪をなびかせて、遙ちゃんは目をにんまりさせた。何だか悪企みでもしていそうな笑顔。何故？

「ええ、週末に面白い光景を見ちゃって！ 主任に早く伝えたくて仕方がなかったんです」

「面白い光景？」

疑問符を浮かべる私に、遙ちゃんは声を潜めた。心配しなくても、周りのデスクはただ空席だ。

「実は、土曜日に鬼東係長を駅前で見かけまして。しかも、デート中だったんですよ！」
「えっ」

……土曜日に駅前です。

その単語から連想されるのは……

「もう彼女がすごい美女で！ いや、鬼東係長つてば、面食いだっただんですねえ。私目を疑っちゃいましたよ。仲良さそうに堂々と手を握って、人目を憚らずに歩く美男美女。それはもう思わず写真に撮りたいほどで……」

「っ！ 撮ったの!？」

反射的に聞き返したら、ちよつと驚いたららしい遙ちゃんは「いえ、まさか！」と慌てて首を振った。

「流石に盗撮はまずいですよ！ こっそり遠くから観察……いえ、眺めていただけです」
ああ、一応良識のある子でよかった……。それにこの言い方からすると、あれが私だったとは気付かれていないらしい。

ほつと安堵のため息を吐きたいところを、ぐつと我慢する。そんなことをしたら不審がられるじゃないか。でもまさか見られていたなんて……。キスのダメージがでかすぎ

て、油断していたわ。迂闊だった。

あれは手を握っていたんじゃないかって、連行されていただけ。そう誤解を解きたいのを何とか堪えて、無関心を装う。

不穏な空気を察したのか、遙ちゃんは躊躇いがちな口調で、だが突拍子もないことを言ってきた。

「大丈夫ですよ、主任！ 係長は主任のことをよく見てますから。きっと本命の彼女ではないんだと思いますよ！」

「はい？」

え、何その励ましている感は。

そしてどうしてそこで、大丈夫が出てくるんだ。何が大丈夫なの。というか、そもそも私が私をよく見ているとはどういう意味だ。見る暇あるなら仕事に集中しろよと、どつきたい。

「えっと、何かこの間から誤解されている気がするんだけど。私、結婚願望どころか、彼氏つくる気もないって散々言ってるわよね？」

「はい。存じておりますよ？」

じゃあ、何でそんな余計な情報をくれるのかしら。

可憐な顔をして一体何を企んでいるのやら。一度全てを吐かせたい。

「でも、それは主任がそう決めているだけですよね。人の気持ちは変わりますし。誰かを好きになっちゃったら、その宣言は撤回せざるを得ませんよね！ 恋とはいつも突然やってくるものでもあります」

「は、はあ？」

うんうん、と一人で頷いている彼女は、次の瞬間私にとびっきりのスマイルを向けた。何故か小悪魔に見えてくる。

「私は応援しますよ、朝霧主任」

そう意味深に告げてデスクに戻って行った彼女を、あぜん啞然とするあまり私は深く追及することができなかった。

何だか妙な誤解をしていないかしら。

月曜の朝から疲れることはしないで頂きたいと、人知れず心の中で重いため息を吐いた。

魔のお昼休みがやってきた。

もし会社で鬼束が私に接触するなら、今だろう。私は会議のおかげでお昼時間が少しずれたことに、机の下で小さくガッツポーズをした。

会議資料を片付けて、退室し始めるメンバーを眺めながら思案する。このままこっそ

り、誰にも気付かれずに外に出るのが一番だ。そのためには——さて、どうするべきか。この会議室から会社の外に出るには、おおよっぱに言っただけで二つ。

一つ目は右に曲がってすぐ近くのエレベーターに乗り込む方法。誰かと一緒に乗り込んで、そっと一階のロビーまで行ってしまえばいい。

二つ目はこの部屋を左に出て、少し先にある非常階段を使う方法。うちの社員は滅多に非常階段を使わないから、誰かに気付かれることなく、ある意味安心して下まで行ける。常に誰かと行動している方が安全な気もするけど、仕事上の接点がある私には、鬼束

は誰がいようと堂々と近づいてくるだろう。「ちよっといいいかな」なんて言われたら、周りも不審がらずにすぐ譲ゆずってくれる。それは困る。

「左に行つて、女子トイレで少し時間を潰してから時間差で階段を使うとか……。うちが会議していたのってきつとバレているわよね。絶対安全区域がトイレって微妙だけど……」

私が非常階段を利用するとは、奴も思わないだろう。

無事外に逃げられたら、今日は穴場スポットの定食屋でお昼を食べよう。それくらい

の楽しみがなくては。そう意気込んで、誰もいなくなった会議室に残った私は、ポケットに仕舞っておいた

秘密道具を取り出した。万が一、外でばったり遭遇した場合に備えて。